

連載

経営者成長の 後押し力

第6回——特別編

新居 智臣

有限会社シンプルマネジメント 代表取締役
中小企業診断士

バーテンダーのレジェンド 毛利隆雄の 弟子の育て方

Legend of
Bartender
Takao Mouri

毛利 隆雄 (もうり たかお)

1947年生まれ。福岡県出身。毛利バー、毛利バーグラン、バープロッサムのオーナー兼チーフバーテンダー。日本大学法文学部を経て、バーテンダーの世界へ。1984、1985年と連続して国内カクテルコンペで優勝。1987年、世界大会に出場し、テイストとテクニカルの2部門で1位となる。現在は国内外のバーテンダーの育成にも力を注いでおり、世界大会の優勝者などを輩出している。弟子の集まり「毛利会」は200名を超える。

撮影：田中 和弘

本連載の第6回は特別編、日本を代表するバーテンダー・毛利隆雄さんに、一流への道、弟子の育て方を聞いた。

毛利さんとは35年にわたる付き合いになる。若き頃、毛利さん主宰の野球チームで「ピッチャー・毛利」,「キャッチャー・新居」のバッテリーを組み、グラウンドでともに汗を流した間柄だ。

毛利さんの店には、レジェンドが作るカクテルと会話を楽しむために、プロ野球・福岡ソフトバンクホークスの王貞治会長をはじめ、有名人が集う。「毛利と言えばマティーニ」と言われる、毛利さんが作るマティーニを飲むために、最近は中国や欧米から足を運ぶ客で賑わうことも多い。

バーテンダーとして有名なだけではない。バー業界を一変させたことでも知られる。お高くとまっているバーテンダーをとことん否定。「居酒屋バー」と言われる、バーテンダーと客が同じ目線で向き合う、客同士の会話が弾むバーを創造した、業界の改革者でもある。

1. バーテンダーという仕事

新居：冒頭から率直に聞きますが、バーテンダーという仕事とは？

毛利：「バカ」にはできない仕事だね。無数にあるカクテルを、お客様の好みに合わせて作るのは当たり前。でも、いらっしゃるお客様はさまざま。大企業の経営者や医者、一般の方まで幅広い。そうしたお客様に、話を合わせるためには知識も必要。だから言い方は良くないけど、「バカ」じゃできな

いんだよ。

新居：たしかに35年、毛利さんと付き合ってきたけど、いろいろな客がいたね。

毛利：昔は、お酒にうるさいお客様も多くいらっしゃった。お客様の要求や要望に合わせてカクテルを作るのが、バーテンダーの基本。だから、「レシピどおり、どうぞ」じゃなくカクテルを作る。それだけでも、すごく複雑になるわけ。

新居：客の相談相手という面もあったように思う。「バーテンダーは精神科医」と言う人もいたような。

毛利：お客様の悩みの相談に乗ることは結構あるね。仕事として、そういう側面を持つことも大事だし。

新居：毛利さんと女性客が、カウンターを挟んでコンソコソやっている。つつい横で話を聞いていると、「今、恋愛相談をやっているんだ」って……。

毛利：よくあったね。それも仕事(笑)。

新居：ところで、バーテンダーをやっていた良かったと思うのはどのようなとき？

毛利：やっぱり、「美味しい」と言ってくれたときだね。それから気の合う人と出会って、飲みながら話をするとき。意外に酒の話はしないけど……。本音で付き合ってくれるお客様には、こちらも本音で対応することが当たり前。本音での付き合いともなれば、お互いに楽しい時間になる。

新居：本音での付き合い。毛利バーが「居酒屋バー」と言われるゆえんだね。

毛利：僕が若い頃のホテルのバーテンダーや協会の人は、上から目線で嫌だった。街場